

## 第1章 被害者と家族の経験

「どうしてこういうことが起こったのですか?」「神はどうしてこういうことを認めるのですか?」「なぜよりによってわたしたちに起こるのですか?」突然降りかかっていた打撃を受け、つらい経験をした時代の証人たちは、そのように問うてきた。

ハロルド・クシュナーは、息子アーロンの子の誕生日に、彼が治る見込みのない病気になっていて、あと一 余年しか生きられないことを告げられた。息子が死んだ後、「善良な人に悪いことが起こるとき」「」という本に次のように書いている。

「そういうことがこの世界にあってはならない!このような悲劇的な出来事は、おそらく身勝手な不誠実な人たちにおそいかかるべきものであって、その際には、わたしがラビとして彼らを慰めようともしようが、……。どうしてこんなことがわたしと息子にふりかかったのだらうか?」

「地上のすべての栄華」など、多くの本で知られているハン・スウィンは、彼の成人した養子のペーターが、どのようにして長期療養の病気で要介護の身となったのか、その痛ましい体験を「愛の力によってのみ」という本に書いている。

アナ・バステイアンは一 歳のとき、治る見込みのない肝がんの告知を受けた。「虹のもとで涙を流す」という本に収められた彼女の「かつてなかった国」という物語は彼女が歩ま

ねばならなかった極限の道を描きだしている。

ドイツ出版業界の平和賞受賞者ハンス・ヨナスは、彼の母も犠牲になったアウシュヴィッツの言いよのない悲惨に対して、手をこまねいて傍観しているだけであつた「沈黙する神」の思いに苦しみ続け、その著書「アウシュヴィッツ後の神概念」でこのことについて取り上げている。

あなたやわたしを含め数千人の人たち、被害者とその家族たちの危機的出来事の体験というものはいずれも似ている。突然降りかかってきた打撃が稲妻のよつに彼らを襲い、彼らの秩序ある生活のただなかに踏み込み、創造の裂け目が彼らの人生を貫いて入り込んでくるのである。

被害者とその家族、また関係者と話したことがある人、場合によっては彼らと一緒に暮らしたことがある人たちはだれでも、常に彼らが求めているものは話し相手であり、理解されることであり、触れ合いであることを知っている。また「教会はわたしたちのためにある」という思いから、キリスト者に対して到底かなえられない期待がかけられていることも知っている。

教会の側でも、被害者の「幸せ」のために、役に立つとしていられることが多くの文書に記録されている。

一九七五年、ケニアのナイロビでおこなわれた世界教会協議会(WCC)の第5回大会は、「教会は一つ 人間は一つ。障害者と神の大家族」という声明を採択した。その後一九七八年、東ドイツのバート・ザーロウで、ヨーロッパ教会覚書が採択された。

一九七九年、ジュネーブで開かれた世界教会協議会は、国連障害者年一九八一が世界に広がるきっかけとなり、教会の自己理解をうながす批判的な問いかけがなされた。具体的に専門担当部署を開設し、そこに一人の障害者を割り当てることが決められた。残念ながら、そのポストは一九九一年、キャンペラでの第7回大会から廃止された。

一九八三年、カナダ・バンクーバー世界教会協議会第6回大会は「参加」を宣言し、「全部門で、教会の決定をする委員会のなかに障害者を加えるべきである」という決議をした。

[ 3 ]

一九八四年、ブタペストでのルター教会世界連盟(LWB)の第7回大会は参加の促進を強化した。

一九九三年、誌上の議論と日常生活の現実とのあいだの溝がさらに深まった。ブタペスト大会のとき、わたしは、障害者が参加する権利「研究グループの代表者として報告を行い、一万二千人の人たちを前にして報告を行ったが、それは挑発的なものであった。わたしは次のように始めた。

『「障害者」問題研究委員会自体が、『障害となる』ものだったのでしょいか?・・・三二五人の代表委

員のなかでこのグループに参加したのは決定権を持たない四人の助言者を除くと三人（一％）に過ぎず、この三人にしても直接的もしくは間接的な被害者でした・・・。」<sup>4</sup>

わたしたちは問題の中心に入っていく。

・被害者とその関係者は、教会をどのように見ているのか？

・彼らは人のケアとキリスト教信仰をどのように経験しているのか？

彼らはキリスト者として、また日常生活をしている者として、とりわけ、社会の身近なところで教会と関係をもっている。彼らが出会う隣人は、教会の一員であり、キリスト者の仲間、あるいは教会のヘルパー、シュヴェスター、ディアコン、また牧師である。

このテーマに関する被害者とその関係者の報告を整理すると、対応のなかに次の三つの傾向が目立つ。

### 第1の経験

わたしたちは、ディアコニー「奉仕」の対象として見られているが、主体として、かわりをもつ教会のメンバーとして見られることはほとんどない。

「教会は、実際にわたしたちに何かをしてくれた。けれども、わたしたちと一緒に何かをすることはほとんどなかった。」

## 第2の経験

説教は、実現するはずがないのにわたしたちの障害や危機的な状態が変わっていくと言って、励ます。けれども、状況を批判的に明らかにして慰めたり、また批判的な対話を通して問題と正面から取り組むように勇気づけることはほとんどない。

「教会は来世に希望をもたせ、この世が変わるように言う。しかし、それはわたしたちの悲嘆と叫びを避け、隠している。」

## 第3の経験

ここでのケアをする教会と牧師は、職務上の役目をおこなう人としてあらわれる。しかし、彼らが個人的に関わり共に苦しむ人、またパートナーであることはほとんどない。

「教会はわたしたちの話を聞いてくれるが、肝心な問題については聞く耳をもたない。結局、わたしたちは危機対処の方法を一人で見つけなければならぬ。」

危機に見舞われた人々は、このようなことを口頭で訴えるだけではなく文書としても書き残している。二千をこえる伝記の分析から、このテーマに関する以下のような事例をあげることができる。

## 第1の経験について

わたしたちは、ディアコニーの対象として見られているが、主体として、共にかかわる教会のメンバーとして見られることはほとんどない。

身体障害者ルイゼ・ハーベル<sup>5</sup>は次のように書いている。

「一月のある寒い雨模様の日に、電話が鳴った。教区の牧師からだった。わたしはその人のことをほとんど知らないが、彼は『次の水曜日<sup>6</sup>に二人の少年をあなたのところに行かせようと思います。彼らはあなたを車に乗せて町のなかを連れていってくれますよ』と言った。わたしにその気があるか、さしつかえがないか、何も聞かなかった。」

彼女が、病院に行く日が近づいていることや、天気もだいぶ寒いことなどを理由にこの申し出を断わるうとしても、聞き流しにされてしまった。

「牧師は聖信礼志願者<sup>7</sup>の少年に奉仕の精神を分らせる必要がある、そのためにわたしをつれて町のなかを車で走ること、よいことではないだろうかということ、使命感に満たされて多弁に語るだけだった。」

そのようなことよりもむしろ二人のお嬢さんが来てくれて、実際に家のなかのことを手伝ってもらえれば彼女自身にとっても単なる奉仕の対象となるだけでなく、実際に役に立つのではないかという希望や、少年たちを心臓病者の家の庭の片付けをするために送るなど、役に立つことをしてはどうだろうかという提案も、牧師としては、奉仕活動を社会に顕示<sup>8</sup>す

ることを意図しているため、聞き流しにされた。

「教会がどんなに多方面で活動しているかを社会に知ってもらうことが、なによりも大事だと言つことを理解してください。」

「このような意図は、被害者をさらに苦しめるものであり、組織の力のおそろしさを痛感させるものである。彼女はこのことを記した章に「隣人愛の対象」という題をつけている。それと知らないで、たびたびそのような奉仕機関の自己宣伝に協力し、貢献していたことを知ると、ゆづりつな気持ちになるものである。これが例外ではなく、「福祉」の「常態」のケースの一種であることが、以下のようにくわしく報告されている。

「一年後に、まだ会ったことのない、後任牧師が電話をしてきた。インタビュを録音するために二人の少年を送りたいのですが、と彼は言った。うちとけた話はできないでしょう。と彼は言った。わたしが車椅子を使う身になっているのに、教会の人たちはわたしのことなど気にも留めていない状況では打ちかけた話はできないでしょう。ですから、少年たちをインタビュに送る前に、わたしを一度訪問してもらいたいとわたしは答えた。しかし、彼は、教会を批判するのはかまいませんと答えるだけだった。」

二人の堅信礼志願者の少年はインタビュをして、それを録音テープに記録するという課題だけでも困難なのに、対話の内容が批判的なものなので途方にくれて<sup>とほつ</sup>いた。牧師が彼女を訪問したのはそれから三年後のことであった。ルイゼは次のように報告している。

「問題に対して答える彼の要領のよい対応にわたしは怒ってしまい、攻撃を始めた。『教会に属しているのに、まったく見捨てられていて、そもそも教会があるのかどうかさえ不安になります。』とわたしは言った。それに対して牧師は『それは障害者の問題ではないでしょう。わたしたちのなかにはひじょうに多くの孤独な人たちがいるのですよ。』と、そつ気なく答えた。『教会がそれを知っていて何も行動を起こさないでいるならばそれは大問題なのではないですか。』と言って、牧師は肩をすくめるだけだった。そして、歴史のある町のお祭りに自分がどんなに協力し活躍したかを事細く説明した。彼が出て行ったとき、残されたのは、彼とは全く話が通じないと言つ気持ちだけだった。障害者との会話から、これが特別のケースではないということが分かる。障害者を一回限りの特別奉仕の対象にする場合によくあることである。」

彼女は、補足として青少年活動のなかから被害者の声を取り上げ、教会の失態を次のように描いている。

「教会は、障害者を、十分に価値ある人として、ここから受けいれてこなかった。わたしたちは同情の対象だ。」

「教会は障害者を必要としていない。また理解して、その身になって考える努力は殆どなされていない。」

「みんなが集まる教会の大ホールが地下室に作られていることは、皮肉である。」

「教会は、自分たちの社会を一緒に形成しないで、単に社会に迎合するだけだった。」

ペーター・ハマー<sup>6)</sup>のアンケートでは、次のような「教会への公開質問」がなされている。

「1 障害者は、いつになったら受け入れられ、『かわいそうな障害者』という扱いをされなくなるでしょ

うか？

2 『わたしたちの障害者・・・』『わたしたちの施設利用者・・・』と言つ言葉が使われるが、何の権利があつて障害者を子ども扱いするのですか？他方では『わたしたちの兄弟』と言つているのに。

3 教会とそのスタッフは、いつ、障害者に対する遠慮がちで否定的な態度をやめるようになるのでしょうか。このような態度は同等の権利に基づいた障害者との協力関係や共同作業を不可能にするものではないでしょうか？（注・憐れみも同じように距離をおいた扱いの一つの形である）・・・

6 キリスト者は自分たちを兄弟また姉妹と呼んでいる。けれども「イエスのために障害者に仕えよう」とキリスト者が言うとき、彼はこの人たちを慈善の対象としている。この場合、障害者が受けとるだけの存在であるとしたら、いったいどのようにして兄弟であると感じることができるようか。兄弟姉妹は互いに助けあうのではないのでしょうか？

8 人は障害者のために働くことができないが、彼らと共に働くことができるということとは、いつになつたら広く理解されるようになるのでしょうか？

## 第2の経験について

牧師は、実現するはずがないのにわたしたちの障害や危機的な状況が変つていくと言つて説教で励ますが、状況を批判的に明らかにして、慰め、手助けをし、あるいは批判的な対話を通して、問題を正面から取り組むよつに勇気づけるものとして語られることは始まらない。

「異端思想を口にすると必ず神が無力でないことを証明しようとする信心深い人たちがあらわれた。こ  
ういうことが何度もあると、わたしは何でも知っている神の弁護人を恐れるよつになりました。・・・」

神には期待しないと決めた。・・・

当時、わたしは何年も聖書を読まなかった。」「

ハインツ・ツァールント」は、深刻ながん患者の女性のもとに来て、彼女の病床で、あなたは苦しむことがゆるさされている」という点で選ばれた人だと語った牧師のことを報告している。

「わたしの神学教師が、がんを病んでいる彼の母を訪ねた牧師のことを、話してくれました。牧師が帰った後で、『どうでしたが、牧師さんは何と言ったのですか』と母に尋ねたところ、牧師は『奥様、苦しみに、苦しまなければならぬ、苦しむことができる、苦しむことがゆるされているという三つのステージがあります』と言った話をしたとの返事でした。母親はそれに加えて『なんとかしてこの人にわたしの痛みを、身をもって感じさせてやりたい』と思った』と言ったとのこと。」「

まひの障害を負うクリスタ・シュレット」は、患者にとって病気であるということ、それは与えられた人生の課題であるということとを納得させることが宣教使命だと思っている地区看護婦の訪問について語っている。

「苦しみは信仰に導くという常識が語られるとつらいものです。障害者のなかにも徹底的な無神論者がいます。苦難の殉教者という烙印をわたしたちに押しやうとする年配の看護婦がよい知らせを語るべきほど、反論をかき立てられることはありません。・・・

あるとき、地区看護婦が訪ねてきました。そして、わたしが病気であるということによって、他の人た

ちが自分たちはどんなに幸せであるかを知ることができるのだから、それを人生の目的と考えなければならぬと説得しようとした。とても信じられませんが。彼女がここに思っていたことは、彼女が口に出していったことは違っているのかも知れませんが……。いずれにしても、障害者がその障害の故に崇拜されたり、その弱点が人間存在よりも重視されたりするようなとき、障害者は気をつけなければなりません。」

同じく身体に障害を負うデニーゼ・レグリクス<sup>10</sup>も彼女が感じた違和感について記している。

「わたしたちの運命について、『神がわたしたちに与えようとしている幸せ』について、話し合うことがしばしばありました。そういう真実とは思えないことを書くこととすると、わたしの筆は反抗しました。わからない！と、くり返し言わなければなりませんでした。」

アンドレ・ミクウエル<sup>11</sup>は、彼の息子ピエールの死について父として反省している。

「息子が逝ってしまったことを、わたしは納得していません。死を間近にした子どもの苦しみは重大な問題です。自分の子どもを犠牲にできるのは神だけであって、人間は子どもを引き渡すことなどできません。妻と同じように、わたしも抵抗しました。わたしたちから彼を無理やりに奪っていった死について、わたしたちは同意していません。子どもを神に引き渡すことが親に出来るのでしょうか？・・・わたしたちは神ではありません。アブラハムも普通の人ではありません。その話はわたしたちには耐えられないものでした。むしろヨブ記のなかに、共感を覚えることを発見してきました。福音書もある時にはわたしたちに重荷でした。」

イングリット・ウェーバー「ガスト」<sup>12</sup>は、精神障害、うつ経験から次のように報告している。

「説教に対する期待は、時と共に徐々に失望に変わっていきました。病気の暗闇のなかでも、ここらに届くような言葉が語られるならば、わたしはそれを身にあまる贈り物と感じるでしょう。しかし、そのようなことは、もう期待していません。これからもそういうことはないでしょう。たびかさなる失望の痛手から身を守る甲羅かづらのようなものを身にまとっているのでしょうか。病気のときには失望の痛みは耐え難いものなのです。」

そしてペーター・ハマーの調査<sup>13</sup>「教会への身体障害者の公開質問」は、一般に広まっている障害についての教会の見方に対して注意をつながしている。

「12 障害が（障害者自身にとっても、またその親にとっても）いまだに神から受けた報いであると感じられ、感じられている事実を教会はどう思うのですか？」

「13 教会は死後の善き生を約束することをやめるべきです。教会はむしろこの世で人間としてふさわしい生活をつくりだすために働くべきです。」

クリスティ・ブラウン<sup>14</sup>は、キリスト教のあの世での救いの教えについて抱いている疑念を書き記している。

「わたしはフランスの巡礼地ルルドで、洞窟に行く道を共に歩んだ人たちのことを覚えています。わた

しは彼らのようにありたいと努力しました。つまり、我慢がよく、快活であり、そしてあの世で待ち受けている報酬のことを考え、苦しみを運命として従順に受けいれるようにしようとしました。しかしそれは何にも役に立ちませんでした。わたしはあまりにも人間的でした。わたしの内にはあまりも多くの人間的な生きた部分があり、神の意志に従順で謙る僕の部分は十分ではありませんでした。わたしはあちらの世界を考える前に、この世にあるものをもっと経験しておきたかったです。」

あるインタビュアー<sup>15</sup>に際して、「シロア」の女性職員がとっさにもらした言葉は、職務上行われている説教と人間の交流から生まれていることと、のあいだにあるギャップをはつきりと浮かび上がらせる典型的なケースといえよう。

「われわれの質問に対する特別学級の女性教師の答えは、『シロア』の施設長の言うこととは違って、生徒たちは宗教への関心を十分にもっています、という思いがけないものでした。けれども施設での説教は受け入れられていません。それは説教が寮生とのトラブルを避けようとするものだからではないでしょうか。ここにはキリスト教のはらむ否定的な側面が感じられます。」<sup>15</sup>

### 第3の経験について

「こころのケアをする教会と牧師は職務上の役目は果すもの、個人的に関わって共に苦しむ人、パートナーとなることはほとんどない。

イングリット・ウェーバー・ガスト<sup>16</sup>は、彼女のつつの経験のなかから、牧師は職務上の支援をしようとするが、そついう援助はあまり必要でなく、共に苦しみを分かちあい、そ

それが自身の人生にまで影を投げかけることを厭わ<sup>いと</sup>ない人、考えていることをおしつけがましく強く言うのではなく、二人の問題解決のために控えめで穏やかな言葉をさがそつとする人、そのようなケアをする人を望んでいる。

「牧師のみなさんが、周辺に追いやられている人々のために色々な努力をされていることは承知しています。けれども多くの場合、牧師としての職務上の支援は行っているようでも、友人として厳しい人生に密接に寄り添<sup>いと</sup>つことはないのではないのでしょうか。つまり、深淵<sup>しんえん</sup>から投げかけられる影が自身の人生にさすことを厭<sup>いと</sup>わず、苦しみに打ちひしがれて「死に行く人たち」と自分自身の人生を一つに結びつけることがないので。

説教を語るときは、うつ状態にある聞き手のことを考えるべきです。信仰のすばらしさを伝えるだけではなく、別の側面について、暗くて骨の折れることについても言葉にしてよいのです。」

二人の知的障害の子をもつ父、アルベルト・ゲレス<sup>17</sup>は次のように言う。教会は何ができるだろうか？彼は「障害を負う子とキリスト教会」というテーマにその著書の一章を費<sup>つひ</sup>やしている。

「個人で出来ること、また教会で出来ることはなんだろうか？たとえは、日曜日の礼拝に連れて行くとき、教会の人々はどのように対応するだろうか。ある家族が障害を負う子を礼拝に連れて行くとき、親は好奇心に満ちた怪訝<sup>けげん</sup>そうなまなざしを受けながら、人のあいだを歩かなくてすむだろうか？彼らは愛に満ちた理解をもって子どもに接していることが感じられるだろうか？子どもが時々起こす騒動は容認されるだろうか。あるいは、世話のやける子どもを連れて日曜礼拝に出席することは、親にとつては、神と世界

から負わされた重荷であることを強く感じるようにという謙讓けんじょうの訓練であり、牧師からも信者仲間からも無視されてしまうのだろうか？

残念なことに、礼拝出席をやめようか、それともおとなしく静かにすることがまだ難しい赤ん坊を一緒に連れて行くべきかと迷い、打ちひしがれている若い母親たちに、説教壇から理解に満ちた励ましの言葉がかけられることはほとんどない。そうでなくても目立っていて、また行儀良くすることができない障害児の親の状況はもっと困難である。障害を負う子の両親は、教会に来ないでくださいと言われることさえある。」

エディット・メイジンガー<sup>18</sup>の「ある脳性まひ患者の手記」のなかでは、その日曜礼拝の様子が描かれている。

「健康な人にとって、脳性まひの人の様子を受け入れることは簡単なことではありません。しかし、この状況について、わたしは一度ほんとうにキリスト者に話してみたいのです。

わたしたちキリスト者は、理屈としては多くのことを知っています。たとえば、キリストに関してはまったく異なった基準が適応されるということも知っています。しかし、実際にはどうでしょう？ わたしはわたしの世話をしてくれる女性と一緒に礼拝に参加し、後ろから三番目の長いすに座りました。そこに親切な女性がきて、ささやき声で、わたしの世話をしてくれる人に話しかけました。『あの・・・』、『すみませんが、お子さんと最後の列に座ってくださいませんか。そうすればだれも気をそらさずに説教を聞くことができますでしょう』・・・

「次の礼拝は聖餐式が予定されていた。わたしの世話をしてくれる女性はわたしが礼拝に参加しないようにするようと言われた。」

残念なことに、多くの伝記の分析からこのような否定的な対応とは異なる希望に満ちたケースを見出すことは困難である。しかしながら、このような分析結果は今後の改善への契機となるものである。二千をこえる伝記の分析から、次のことが確認される。

教会や牧師のケアの問題について正面から取り上げている伝記は比較的少数である。このことから教会は大部分の被害者の人生に重要な役割を果していないことが推定される。

教会と牧師のケアの経験を伝える伝記は、この経験を一致して否定的に評価している。

このような分析結果が見られるにも関わらず、伝記では彼らの信仰体験をこれからも続く人生に重要な意味をもつものとして評価している。(本書第3章の「生活の中でのケアと信仰」を参照)

結論は次のようになる。

・被害者とその関係者たちとは、教会と牧師のケアを否定的に経験したにもかかわらず、自分の信仰体験を肯定的に守っている。

らせん

たましいの旅路のシンボル

